

研究分野	増養殖技術	機関・部	水産総合研究所・資源増殖部
研究事業名	尻屋磯根資源調査（地球温暖化による沿岸漁業環境への影響評価・適応策検討調査委託事業）		
予算区分	受託研究（（独）水産総合研究センター）		
研究実施期間	S57～		
担当者	藤川 義一・松尾みどり		
協力・分担関係	尻屋漁業研究会・尻屋漁業協同組合・下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所		

〈目的〉

尻屋沿岸の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

〈試験研究方法〉

平成21年6月10日に、太平洋に面する尻屋沿岸に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計66調査点で潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1～2枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。底棲動物のうち、エゾアワビについては殻長を測定するとともに、貝殻螺頂部分の着色から人工種苗を判定した。調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計160個体については、生殖腺重量、身入りを求めた。

〈結果の概要・要約〉

○2年目マコンブ

2年目マコンブは、11地点で生育が見られ、平均生育密度が2.4本/m²で前年に比べ増加した（図1、図2）。このため、本年のマコンブ漁獲量は前年以上であると考えられた。藤石崎周辺の浅所に生育した2年目マコンブは、マコンブが海水流動でウニを払いのける、いわゆる掃除効果によって生長したと考えられた。

○1年目マコンブ

1年目マコンブは、6地点で生育が見られ、平均生育密度が1.3本/m²で調査開始以来最小値を示した。この理由には、マコンブの発生に影響があるとされる1月下旬の水温が高く推移したため、マコンブの発生が減少したと考えられた。

○エゾアワビ

エゾアワビは、調査海域の中央付近と南端の一部に比較的多く生息していた。平均生息密度は0.31個体/m²で、水深別では水深2.5～10mで0.5個体/m²以上、水深15m以深では0.1個体/m²以下に留まった。殻長9cm以上の漁獲サイズ個体の割合は前年に比べ減少した一方、殻長4cm以上9cm未満個体の割合が全体の70%を占めたため、今後の漁獲資源への加入が期待された。

○キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全地点の86%に相当する56地点で採取され、平均生息密度が平均3.5個体/m²、平均現存量が平均300g/m²で昨年と同様高い値が維持された。水深10m以深では殻径50mm未満の小型個体が多く、資源の加入が考えられた。身入りは低い水準にあり、水深2.5mでは15%以上であったが、10m以深では9%以下に留まった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

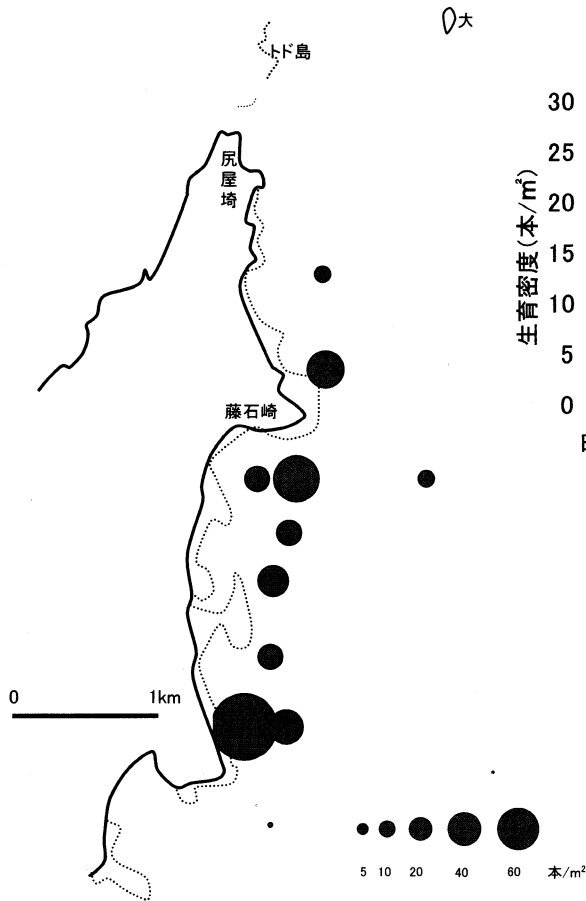


図1 平成21年6月の尻屋沿岸における2年目マコンブの生育密度(本/m²)

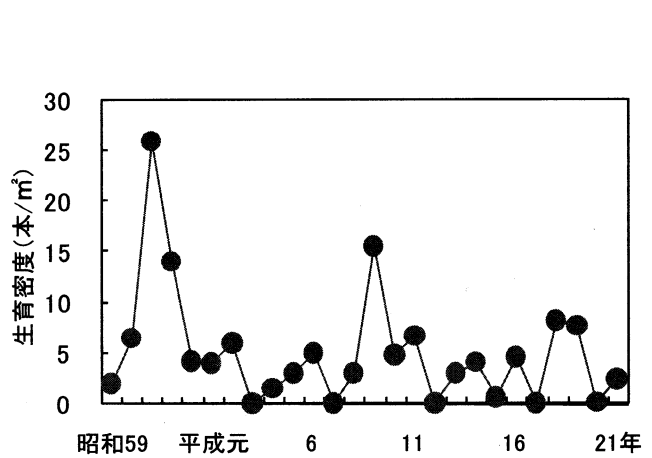


図2 尻屋沿岸における2年目マコンブの生育密度変化

〈今後の問題点〉

調査海域では、キタムラサキウニの生息密度が依然高く、資源の加入が考えられたため、磯焼けの発生、持続が懸念された。特に水深10m以深に生息するキタムラサキウニは身入りが不良なことから、積極的な駆除が必要であると考えられた。

〈次年度の具体的計画〉

平成22年6月に調査を継続実施する予定である。

〈結果の発表・活用状況等〉

平成21年6月10日の調査当日、尻屋漁業研究会に対し調査結果の概要を報告した。

平成21年8月に、尻屋漁業協同組合に調査報告書を提出した。